

江戸期女性たちの伊勢参詣

— 女性たちの旅日記を中心に —

柴 桂 子

江戸期女性たちの伊勢参詣記

No.	日記名	著者	旅をした年	出身地	身分	年齢	旅の目的	期間	行程・訪問地
12	美濃参宮記	長井美濃	文化11(一八四一)	松坂(三重)	商家妻	41	伊勢詣	5日	松坂—古市—伊勢
11	雪月集	六沢民子	文化4(一八〇七)	水原(新潟)	歌人	約4ヶ月	伊勢詣	約4ヶ月	飯田—伊勢—奈良—大坂—京都—高野山
10	刀環集	帆足京	享和元(一八〇一)	山鹿(熊本)	神官娘	15	遊学	約8ヶ月	鶴崎—大坂—京都—松坂—伊勢—近江—大坂
9	いせ路の記	久米	寛政8(一七九六)	京都	女官か	16日	伊勢詣	16日	石山—草津—伊勢—奈良—京都
8	杖の祝ひ	月のや弄花	寛政7(一七九五)	下津井(岡山)	俳人	40	伊勢詣	約40日	高砂—生田—大坂—奈良—京都—和歌山
7	笠の塵	燕志・琴上	寛政5(一七九三)	広浦(和歌山)	俳人	55	伊勢詣	約40日	京都—奈良—伊勢—近江—大坂—和歌山
6	春のみちくさ	山梨志賀子	寛政4(一七九二)	庵原(静岡)	商家母	39	西国巡礼	約4ヶ月	鳳来寺—伊勢—京都—奈良—高野山—叡島—金毘羅
5	西国巡礼道の記	武元花	天明3(一七八三)	吉永(岡山)	名主母	59	西国巡礼	41日	播磨—丹波—丹後—近江—美濃—三河—伊勢
4	青葉山路	細川清源院	天明3(一七八三)	江戸(東京)	大名母	40代	熊本より江戸へ	約1ヶ月	熊本—大宰府—室—大坂—京都—伊勢
3	そのしをり	松本古友	安永8(一七七九)	江戸(東京)	俳人	40代	吉野花見	約1ヶ月	江戸—伊勢—吉野—京
2	伊勢紀行	藤尚資母唯行院	宝暦12(一七六二)	京都	儒者の娘	15か	伊勢詣	約20日	膳所—鈴鹿—津—伊勢
1	伊勢紀行	向井去来・千子	貞享3(一六八六)	京都	儒者の娘	5〜6日	伊勢詣	5〜6日	草津—鈴鹿山—伊勢

No.	日記名	著者	旅をした年	出身地	身分	年齢	旅の目的	期間	行程・訪問地
30	野分の名残	中山三屋	慶応3(一八六七)	京都	歌人		伊勢詣	39日	善光寺—松本—伊勢—奈良—大坂—京都
29	下国日記	松平繁子	文久3(一八六三)	江戸(東京)	大名妻	37日	江戸より国元杵築へ	37日	大津—草津—ひわれ山
28	参宮道中諸用記	今野いと	文久2(一八六二)	本荘(秋田)	武家妻か	151日	伊勢詣	151日	東海道—伊勢路—大和路—奈良—大坂—船路
27	都のつと	松尾多勢子	文久2(一八六二)	伴野(長野)	名主妻	約8ヶ月	政治活動	約8ヶ月	羽黒山—善光寺—京都—奈良—伊勢—松坂—熱田
26	業桜日記	深見としの	文久元(一八六一)	岡崎(愛知)	商家妻	25か	京都見物・伊勢詣	25日	中山道—京都—大坂—奈良—伊勢—松坂—熱田
25	たびのみちくさ	西村美須	万延元(一八六〇)	母里(島根)	名主後家	158日	回国・巡礼	158日	名古屋—大津—京都—宇治—奈良—善光寺
24	伊勢参宮諸入用控	西谷へい	安政6(一八五九)	古市(大坂)	商家母	13日	伊勢詣	13日	初瀬—伊勢—鈴鹿—草津—伏見
23	伊勢参宮道の記	中島休	嘉永5(一八五二)	枚方(大坂)	商家娘	16日	伊勢詣	16日	伊勢—近江—京都—大坂—伊勢
22	旅日記	瀬戸岡野	嘉永元(一八四八)	御坊(和歌山)	商家妻	約1ヶ月	伊勢詣	約1ヶ月	伊勢—近江—京都—大坂—伊勢
21	たびにつき	瀬戸岩	嘉永元(一八四八)	御坊(和歌山)	商家妻	約1ヶ月	伊勢詣	約1ヶ月	伊勢—近江—京都—大坂—伊勢
20	浪のもくつ	竹川管子	天保12(一八四一)	射和(三重)	商家母	数日	伊勢詣	数日	射和—松坂—伊勢
19	東路日記	小田宅子	天保12(一八四一)	底井野(福岡)	商家妻	約5ヶ月	伊勢詣	約5ヶ月	叡島—金毘羅—大坂—伊勢—善光寺—江戸
18	二荒詣日記	桑原久子	天保12(一八四一)	芦屋(福岡)	商家母	約5ヶ月	伊勢詣	約5ヶ月	瀬戸内—大坂—吉野—伊勢—大和—吉野
17	伊勢詣日記	阿部峯子	天保11(一八四〇)	植木(福岡)	商家妻	40日	伊勢詣	40日	瀬戸内—金毘羅—京都—伊勢—大和—吉野
16	東遊日記	頼梅颯	文政12(一八二九)	竹原(広島)	学者母	約8ヶ月	伊勢詣・花見	約8ヶ月	京都—伊勢—大和—宇治—京都
15	道の記	田中愛	文政10(一八二七)	大山(山形)	商家後家	約4ヶ月	伊勢詣	約4ヶ月	大山—木曾路—伊勢—京都—伊勢—大坂—江戸
14	伊勢詣日記	中村いと	文政8(一八二五)	江戸(東京)	商家妻	81日	伊勢詣	81日	野—金毘羅—叡島—東海道—伊勢—奈良—吉野

はじめに

手元に集まった約二〇〇点の江戸期女性たちの旅日記の中で、伊勢参詣のもの、あるいは旅の途中で伊勢参詣をした記録のあるものは三〇点ほどである。十五%にあたるこの数字を多いと見るか少ないと見るか。いずれにしても伊勢参詣は、江戸期の女性たちにとって何であつたのか。伊勢参詣に対してどのような思いを持っていたのか。参詣した女性たちに何をもちたのか。思いつくままに女性たちの旅日記から見えてくるものを探ってみよう。

旅日記を書き残すということが希有なことであるので、旅日記からだけでは片寄つた見方になるであろう。そこで先達の研究や他の史料を借りて、旅日記を書き残さなかつた女性たち、特に村の女性たちの伊勢参詣も少しばかり考えてみたい。

(ここでいう旅日記には、紀行文、句吟集、詠草、道中諸用記など様々な形のものを含む)

一、伊勢参詣への思い

伊勢参詣に対して日頃から女性たちはどういう思いを持っていたのか、旅日記の中からいくつか拾ってみよう。

紀伊国有田郡広浦(和歌山県有田郡)の商家の後家花鏡井燕志(本名橋本つね)は、寛政五年(一七九三)三月、岩崎桃之同門の花養窓琴上と共に伊勢参詣に出かけた。

のしる所にして誰かあふき尊とまさらむ されは数ならぬみつからも大宮にまうてゝなり出にしはやしらの幣をも奉らまほしく年ころゆふたすき心にかけてそねき奉りぬ^①

出羽国庄内大山(山形県鶴岡市)の商家の後家中愛が、文政十年(一八二七)二月に伊勢参詣に出立した折の思いである。身分の高低にかかわらず、天照大御神を尊とばない人はなく、自分もまた日頃から参詣したいと願っていた。その念願がかなつたのは、夫没後八年たつた愛四十七歳のときである。おそらく夫の七回忌を終え、隠居の身となり時間的にも経済的にも余裕のできた頃であろう。

神風やいせの大御神を始奉りて すめらぎの大宮所の御ありさまをも ろろがみ奉らん事をはやくより心つくして物しつるを いつしか年もかさなりて^②

筑前国植木(福岡県直方市)の薬種商の主婦阿倍峯子は天保十一年二月(一八四〇)に歌仲間の人らと伊勢参詣に出かけた。峯子もはやくより参詣したいと、四十八歳のその日まで心に思い続けていた。

文久二年(一八六二)一月、老中安藤信正が江戸坂下門外で襲撃されるなど江戸の町は騒然としてきた。その年の閏八月には参勤交代緩和令が出され、続いて江戸に留め置いた大名妻子の帰国許可が出された。そのため大名家の女

「かねていせのふた神へ詣奉りたき志のありて」と、その折の吟行集『笠の塵』^③の初めにある様に、前々から伊勢参詣を望んでいた。

わらはへのすなる めけ参宮せんとして ふたりみたりかたらひあはせて いて立侍る(略)

いせにまうてつきぬ はるくのみちも つゝかなくて古の 御神を拝見 まいらする事の いとうれしく年頃のねかひ みちてなみたも 落るはかりになむ^④ 備前国下津井(岡山県倉敷市)の月のや弄花(小屋野)は、四十歳のとき、二、三人の仲間と出かける。子供たちのする抜け参りを、真似ての出発である。神前で日頃からの念願がかなない涙の出るほどの喜びに浸る。

とし比伊勢へまうてん宿願有しか こたひやくこと極りて よき日をゑらひ卯月の末の一日に出立へきにさたまれり

これは徳島県立図書館で見付けた自筆本と考えられる「いせ路に記」という旅日記であるが、収集した旅日記のなかでも珍しく、著者久米なる人物の経歴が不明である。内容からして公家の女性かと思われる。ここにも伊勢参詣が日頃からの宿願であつたことが述べられている。

かけまくもかしこき天照しまします大御神のおふみ徳はこの大み国になりいつる高きもみしかきも皆人

性たちが続々と国元へ向かった。こうした緊急の折のことであるので、伊勢参詣に寄り道することはばかられたが、豊後国杵築(大分県杵築市)藩主の妻松平繁子は「何事を置きても伊勢の御宮にはまうてむと思ひし」と、強い意思のもとに伊勢参詣を果たしている。^⑤

以上何点かの旅日記から見ても、女性たちが日頃から伊勢参詣に対して並々ならぬ思いを持っていたことが分かる。

二、伊勢参詣の年齢別・身分別分類

伊勢参詣をした時の年齢・身分を判明できるもののみを表に書き入れてみた。年齢別を考えてみよう。

十代	四名 (十三%)
二十代	一名 (三%)
三十代	三名 (十%)
四十代	六名 (二十%)
五十代	八名 (二十七%)
不明	八名 (二十七%)

旅の目的が異なり、特に自分の意思でした旅ばかりではないので、これらの数字から判断するのは危険であるが、伊勢参詣も旅全体から見た数字と同じく、^⑥四十代五十代が圧倒的に多い。

十代の伊勢参詣が四名いるが、これらの旅は、嫁入り前

の娘たちが家族や親戚と共に出發しており、一般の伊勢参詣とは異なつた特別の意味を持つているものと考えられる。

身分別を検討してみよう。

大名家の女性 二名 (七%)
 名主の妻・母 三名 (十%)
 俳人・歌人 五名 (十七%)
 商家の妻・母 十三名 (四十三%)
 その他 七名 (二十三%)

圧倒的に商家の妻や母が多い。しかも、四十代以後の年齢が多いことを考えると、隠居するかそれに近い年齢になり、経済的にもゆとりが出來て、長い間の念願の伊勢参詣を元氣なうちに果たしたいという現れであろう。俳人や歌人と区別した人々の中にも、商家や名主の母などもあることから、伊勢参詣には、やはり、経済的な裏づけが必要であつたことは言うまでもない。大名家の女性が伊勢参宮でゐるのはまれである。

三、伊勢での滞在日数と宿泊

女性たちは伊勢で何日滞在し、どこを宿としたのか旅日記で読み取れるものを拾つてみよう。

駿河国庵原 (静岡県庵原郡) の商家の後家山梨志賀子は

行と初参宮に出かけ、四日間滞在している。^①

出雲国母里 (島根県能義郡) の名主の後家西村美須は子や夫に先立たれたため回国・巡礼の旅に出た。百五十八日の旅の中で、伊勢へ立ち寄り三日間を過ごしている。^②

三河国新堀町 (愛知県岡崎市) の商家の妻深見としのは夫や子、それに親族らと京都・奈良を遊覧した帰途伊勢参宮をし、二泊した後三日目には二見の宿を出ている。^③

信濃国伴野村 (長野県下伊那郡) の名主の妻松尾多勢子は文久二年 (一八六二)、諸国の志士が集まる京都へ旅立つた。勤王公家や志士たちと交わつて勤王活動をしていたが、身辺が騒々しくなつたので迎えに來た長男と共に帰途に就き、伊勢へ立ち寄り六日間伊勢で過ごしている。^④

杵築藩主妻松平繁子は公の旅であつたので、伊勢参詣をわずかに一日で済ましてゐる。

出羽国本荘 (秋田県本荘市) の今野いと (身分は不明) が伊勢参宮に出かけた折の金銭の記録「参宮道中諸用記」によれば、二日間を伊勢で過ごしている。^⑤

以上から見て平均的には三日間の滞在が多い。四、五日以上の滞在になると、中の一日は雨などで宿に留まつていたようである。

男性の伊勢参宮は御師と呼ばれる旅館業を兼ねた旅行幹

三男を伴つて西国の旅に出た折に伊勢参宮をし、ゆつくりと六日も滞在している。^⑦

江戸の御用達商人の妻中村いととは親族と伊勢参宮に出かけ、五日の滞在である。^⑧

京都の久米も三日の滞在である。

肥後国久原 (熊本県山鹿市) の神職の娘帆足京は、父母と共に父の国学の師である伊勢国松坂の本居宣長のもとに遊學した折、伊勢神宮へ初参宮して三日滞在している。^⑨

越後国枯木又村 (新潟県十日町市) のしうとふよは千キロにおよぶ初参宮の旅に出かけ、伊勢ではわずか二日間しか滞在していない。^⑩

出羽国の田中愛はほぼ四カ月におよぶ旅ながら、伊勢には三日ほどの見物で終わつてゐる。

安芸国竹原 (広島県竹原市) の広島藩儒學者頼春水の妻梅颯は長男山陽の誘いを受け再三京都へ上り近郊を旅したが、伊勢へも出かけ三日間滞在している。^⑪

筑前国植木の阿倍峯子も同じく三日の滞在である。

筑前国底井野 (福岡県中間市) の商家の妻小田宅子は歌仲間桑原久子らと伊勢・善光寺・日光参詣の旅に出たが、伊勢では雨に遭つて一日どこも行かなかつた日を含めて四日の滞在である。^⑫

河内国枚方 (大阪府枚方市) の庄屋の娘中島休は親戚一

旋業者案内されて行なわれることが多い。講を組み共同体の行事として参詣するのが一般的であるので、その場合は伊勢での宿泊施設は御師の館である。そこでは御神樂や山海の珍味のご馳走でもてなしが行なわれる。

ところが、女性たちの伊勢参宮は講を組んでいくことなく、家族や親族あるいは友人と行く場合がほとんどである。そうした場合、宿泊や方々の参詣の案内はどのように行なわれるのだろうか。女性たちは御師とはまったく無関係なのであろうか。宿泊先と参詣案内人を分ける限りで拾い出してみよう。

山梨志賀子 閏二月三日 伊勢山田 水溜吉郎大夫

(年来の折りの師)

四日 明見町の宿

五日 同

六日 磯辺村の宿

七日 山田御師

中村いと 四月朔日 藤波神主 (禁裏御師)

二五日 同

久米 四月二十五日 御炊大夫

二十六日 二見が浦の宿

田中愛 四月二・三日 三日市小林某御師

(陸奥・出羽に多く檀家

伊勢詣日記

三月二十八日 二見の宿
 堤館の何かしの神主
 四月
 三月二十九日 妙見町ふじや
 三月十三日 内宮近くの宿
 十四・十五日 外宮近くの宿
 三月九・十日 御師高向大人
 十一日 二見が浦 紅葉屋
 十二日 宮川の川田屋
 三月十六日 山田すじかい橋田中屋
 十七日 柘植喜大夫

阿部峯子「伊勢詣日記」

十八日 三ツ嶋栗谷大夫
 十九日 川崎 二見屋
 三月十七・十八日 御師吉郎大夫
 四月二十一日 妙見町の宿
 二十二日 二見の宿
 四月十日 山田の宿
 十一日 二見の角屋

公家の女性と思われる久米や豪商の妻たちは、夫や父親の關係であろう、懇意の御師のところに泊まり御神樂やご馳走の歓待を受けている。西村美須のように長い期間をかけて巡礼の旅をする者は、その日に宿を決めることもある。案内は御師の所に宿を取った場合は案内人を雇っていることもある。一般の宿に泊まった場合は案内人を雇っていることもある。

四、伊勢で見たもの・訪れたところ

肥後国宇土(熊本県宇土市)藩主の未亡人細川清源院は亡き夫の墓参のため国元に下り、六ヶ月の滞在の後、天明三年(一七八三)四月、江戸へ向かった。途次伊勢へ立ち寄り内宮・外宮を参詣した。

内宮へ行路 あいの山あいの山有 物貫の非人の十四五才の女子のおかしき衣類着かざりて少き家に三弦こ

と、海辺ののどかな景色に満足し、塩合の渡しを経て宮川の渡し舟に乗り伊勢を後にする。

久米は宿に着くと旅の衣を脱ぎ捨て清らかな衣に着替えて外宮・内宮に参拝する。

手あらひ口すゝきやかて広まへに入みはしらちかくぬかつく いとかしこし

天照す神路の山の宮はしらいく代くちせぬためしをそむむ

久米もまた朝熊山に駕籠で登り、金剛證寺の虚空蔵堂に額すき、峠の茶屋から海山の景色を眺め、子規の声を聞きながら二見が浦へ向かう。二見が浦の浜辺で貝など拾い、夜は酒を飲み供の者たちを集めて歌を詠み交わす。

浪よする二見の浦の松かけにむかふもすゝし夏の夜の月

十五歳の帆足京は天照大御神を祀る内宮に詣で昔よりこの世の中を天てらす神のみ前を拝む尊とさ天照大御神の食物の守護神・豊受大御神を祀る外宮で豊受の神のみたまを懸まくもかしこみまつれ世の中の人

朝熊山に参詣しない心残りを

山高みのぼる便もなきまゝに下陰よりやわれはしのばむ

弓ひき小歌うたひて居る おさなきも有て躍なとし老たるは坐して往来の人に物をこふ
 大名家の女性の目に、着飾って歌い踊って往来の人々に物を乞う少女たちの姿は何とも哀れに映ったことであろう。山梨志賀子は外宮や末社や内宮を参拝し、夕刻に古市へ行く。

遊ぶ君あまた伊勢音頭とかやいへる唄にあはせておとり舞侍る まことに興ある事にこそ倍よめる

にきはへる里の名にあふ梅柳いつれをとらぬ錦とそ見る

志賀子には日頃目にしたことのない華やかな遊離の賑わいが珍しく興味深かったらしい。古市は天明期(一七八〇年代)には、妓楼七〇軒、遊女約千人を数え全盛期であったという。志賀子の訪れた寛政四年(一七九二)には、まだ賑やかさは続いていたのである。志賀子は翌日には朝熊山に登り、本尊虚空蔵菩薩を安置する荘厳な金剛證寺のたたすまいを拝観し、奥の院まで足を延ばす。「此所はれたる日にはわか古里の富士も見ゆるとなん」と期待したが、その日は雨模様で富士を見る事が出来なかった。鸚鵡石や二見が浦も見物し

玉くしけまき絵もかくらん二見渦波にうきゆく海人のつり船

息子の伊勢参宮の折に同行して、京・難波・大和・須磨など名所旧跡を訪ねようと旅立つた越後国水原(新潟県北蒲原郡)の穴沢民子は、宮川の渡しに着くと嬉しさに胸をときめかす。

あまてらす神のめくみにひかれつゝけふみや河をわたるうれしさ⁽¹⁹⁾

伊勢国松坂の本居宣長の二女で松坂の豪商長井家に嫁いだ美濃は、兄春庭が三十歳で失明した後、代筆をして兄を助け、宣長の学問を継承して言語学者として大成させた才女として称えられている。美濃は四十一歳の文化十一年(一八一四)に伊勢参宮をした折の旅日記を残している。外宮に参詣した後、宮崎文庫に立ち寄り桜を鑑賞する。

夕まくれたつねきつればちる花もさながら雪のふるかとそ思ふ

翌日内宮に参拝しても気にかかるのは桜の開花具合である。

あふき見るこゝろもすみてみすゝ川むかふ神路の山さくら花

かしこくも神の御山にさきにはほふ花のさかりをあふき見る哉⁽²⁰⁾

伊勢の近くに住む美濃は伊勢参宮は何度も済ませているのであろう。花の盛りの伊勢は毎年心にかけているらしく

美濃の参宮記は花の歌で埋まっている。

中村いとの伊勢参宮は、江戸の御用商人の家族や親族の一行というだけに、迎える側も盛大な歓待である。世話を引き受けるのは禁裏御師の藤波神主家である。櫛田(三重県松阪市)の紅葉屋に宿を取ったところから歓待が始まり、藤波より新鮮な鯛二枚と鮑十個が届けられる。新茶屋に着くと迎えるの簞輿が数丁届き、それぞれそれに乗り、稲木(松阪市)、宮川の渡しを経て二見が浦へ向かう。その夜の宿は藤波神主家であるが「種々馳走ありてうるさし」といっては歓待の大仰さを迷惑に感じている。

翌日はいよいよ念願の内宮の参拝をする。「何ごとのおわしますかはしらねともかたじけなさになみだこぼるゝ」という西行法師の歌が思い出され「此歌のごとく覚へてい」といふかたし」と感動し、「中村氏の御用のつゝがなく子孫繁栄家従の繁昌とりどりねき奉り」額づき祈願する。それより末社をめぐり宿へ帰る。その日は太々講で二、三年振りの賑わいとあつて藤波神主家でも大層なもてなしの用意ができていた。

七五三の料理とて種々さまざまなりかねて聞しごとく太々講中へは御師よりの馳走はことに美をつくすといひしがさることにてとりならべたる数多きを見るばかりなりける無益の事なりといふべし

宮に参詣し、木々の莊嚴さに心を打たれる。

蔭高く神代なからの佛もたちつらなりたる松杉の常盤の色深くわけ入袖もしめりかちにいと尊とく

それより末社をめぐる。夜は御師の館で御神樂が奉納される。

笛吹鼓打ち女かんなきふたりみたり鈴と扇を手にもち声ふり立て神歌うたふさまかの宇受女の命の古おもひ出られて御おん神もさこそなといとくかしこきわさになんおほえぬ

愛は華やかな巫女たちの神歌や舞いに、いにしえ天岩屋戸の前で舞いを舞つて天照大神を慰めたという天鈿女命の舞いを連想させられ感動する。

翌日は宇治へ行き堤館の某神主を訪ねると大歓迎で、早速案内人を付けてくれたので内宮参拝に出かける。

まつ五十鈴の川におり立手あらひ口すゝきなとすれはいともしつけき常磐木の深きみとりの色しつみていとく清らに心のそこも澄わたるはかりなり空高みとりの蔭を分のほれば玉串の御門の内をゆけはいとかしこきわさなから入て御饌奉るにみや人祝詞よみ柏手うつ音はいと身にこたへて年ころのねかひみちぬることの嬉しさいみしくぬかをつくくおかみ奉り

帰りには荒木田末尋を訪ねて歌を詠み交わす。その翌日

翌日は雨であつたので、古市へ芝居見物に行く。そこへ女形どもが又押しかけ、帰りには藤波まで供をして来た。次の日は藤波で休息し、江戸へ送る買物などして過ごす。いと一行の伊勢参宮は当時最高級のものであつたと思われる。

出羽国を出発して三十八日目に伊勢入りした田中愛らは事前に連絡を取っていた御師三日市家に宿をとる。翌日外

は鸛鶴石、朝熊山、二見が浦に出かける。

筑前国の阿倍峯子は二見が浦を経て朝熊山に登り、その日は内宮近くの宿に泊まる。朝早く内宮を参拝する。四月十四日のその日は「御衣更のみ祭」ということで機殿より簀にいて運ぶ行事を見る。

昼の九ツといふに詣つ 此度は二ツの御門をひらけは
神の御前を近く拝み奉る事 みめくみの有かたさうへ
なう思ひ奉りて

宮人の卯の花衣みるからにこゝろ涼しき神祭かな
それより峯子は供のもの一人を連れ、合の山を越え祭りを
見て古市を通つて外宮へ参拝する。

前年の峯子の伊勢参宮に刺激されて旅立つた筑前国の小
田宅子は吉野の桜を見た後伊勢へ向かう。御師高向家に宿
を取り、湯浴みし髪を整えた後、駕籠で外宮に参拝し、合
の山を通つて内宮へ向かう。そこで宅子は面白い光景を目
にする。

五十鈴川にて長きさほの上にあみをはりて 橋の上よ
りなぐる銭をとるものあり 其銭をなぐるさま鳥など
の飛なふが如くにいていとおもしろし

翌日は雨であつたのでどこにも出かけない。その次の日
は朝熊山に登り、みづみづしい青葉の中に鶯の声を聞く。
茶屋から見る海原、山と海の景色を満喫する。虚空蔵堂に

参詣し、大和の薬師寺のものを移したという仏足石を見る。
山を下り二見が浦へ向かう。日が高いので海辺で貝など拾
う。その夜は夜中から起き出て二見が浦の日の出を待つ。
山田へ帰り、再び内宮を参拝する。

宅子に同行した桑原久子は外宮で
まき柱ふとしきたてしいにしへもいまもかわらぬ伊勢
の神宮

と、時の長さを歌に込める。古市の遊女を見て
ゆふぐれはよるべもなみのうかれめがをちこちびとの
ころもひくらむ

枚方の中島休が初参宮で参拝したところ、見たものは外
宮、四十末社、天の岩戸、太々神楽、古市備前屋での踊り、
お杉・お玉の三味線と踊り、二見が浦、夫婦岩。出された
食事は赤飯、三ツ膳の馳走である。

出雲国の西村美須が身内を次々に亡くし「世をうき事に
思い為す業も身に添はず 今は年来の願を果さむやと思ひ
起して はるけき旅路に」と国を出たのは二月の晦日であ
つた。伊勢に着いたのは四月二十一日である。

山田へ来りて先づ外宮へ参詣せんと思いつゝ一の宮へ
至るに 社人多く居て賽銭を乞 適々参りし事なれば
いわずとも心得あるべきにとおかしく それより御宝
を拝し奉り四十末社八拾末社にも家内の無事を祈り

天の磐戸へ八町登りて道々の社々を拝し磐戸へ入る

翌日は町外れの合の山で「お杉お玉とて美しき女 粧て
わけもわからぬ 三味線をめつたに引にす」を眺めつつ、
若い供の者が前夜売女を慰みに行ったのをからかいながら
内宮へ向かう。宇治橋では

大男の四ツ手網の如きを持つものもあり 竹の先に俵
の蓋を結い付 旅人のなげし銭を争うてひろう 誠に
業とはいいいながら おとなげなき有様なり
さらには

是より欄宜の家あまた建並び鳥居の内には数多の土産
もの商う家軒を連ね 茶をひさぎ餅を進め人を見わけ
て手をたゞき姦しく云はるさま面白き事におもひ行過
ぎて 神前に近付きぬれば両方に円座を敷き白衣の神
人打並び賽銭を乞う

いずれも生きるための業とはいえ、農村で農に励む業と
は異なつたさまざまな人々の生業を目の迎りにして、美須
は複雑な思いであつただろう。

翌日朝熊山へ向かつた美須はそこでも気にかかる男の子
に出会う。

一二、三ばかりのだんし裸にて大神宮の御守をかけし
ものあり 国を問へば江戸なりと云う ただ一人抜参
して路金はなくなり 此三日断食のよし申す故に ふ

びんに思いて情をかけつかいしなれば大いによるこび
あとより慕い来れども我等は二見へ下る故別れを告
げて過行しがいかなりしや知らず

女性の旅日記で抜け参りの子供の描写は珍しい。美須は
深い悲しみを持っているので人間に関心を持つらしく美須
の旅日記には随所に人間観察が書かれていて興味深い。

二見が浦では早朝に起き日の出を待つ。

二見潟待つ間もながき日の出かな
今やくと待つ内 東天一面に赤くなり追々と光つよ
く見るうちに 海つらをはなれ給う 其の時赤き事濃

き紅の如くにて おどろきたとへ申すも勿体なき事な
がら 大なる朱盆の如く ありくと拝まれさせ給う
よし 三尺ばかりも上り給う時 光散乱して拝するを
あたわず

美須はしばしうなだれ祈念して帰路に赴く。川口は「諸
方の廻船入込所にて繁昌大方ならず 軒並奇麗にして」「伊
勢街道の随一なり」と活気ある湊町が気に入つたらしくべ
た褒めしている。

杵築藩主の妻松平繁子は幕末期の江戸の騒動を避けての
領地へ向かう途上のことであつたので、わずか一日の伊勢
滞在ではあつたが、内宮・外宮を参拝して満足して山田を
後にした。

我もけふ願ふことみな豊受の神の御名さへ頼もしきかな

浅からぬ恵を受けてけふこそは天照します神の宮居に

思ひかけず我が本意かなひてまうでたる 神慮のいぢるしき事 よにも有りかたく この嬉しき身に余りてこそ覚ゆれ

女性たちが伊勢でかならず立ち寄ったのは内宮・外宮はもちろんのこと、二日以上滞在した場合には、古市の伊勢音頭や天の岩戸や鸚鵡石、二見が浦に足を延ばしている。現在では観光道路の伊勢志摩スカイラインが走っているにもかかわらず、あまり訪れなくなつた朝熊岳や臨濟宗金剛證寺や奥の院に、江戸期の女性たちが、道の困難さにもかかわらず多く訪れているのは、頂上に近い茶屋からの遠く富士山まで見渡せる展望のためだけではなからう。金剛證寺の御本尊・福威智満虚空菩薩像は秘仏で伊勢神宮遷宮の翌年、二十年に一度の御開帳の時しか拝観できなかったにもかかわらず女性たちは朝熊岳へ登り本堂の前で手を合わせた。伊勢音頭にも「お伊勢参らば朝熊をかけよ朝熊かけねば片まいり」と唄われた宣伝効果ということでもなからう。

女性たちが朝熊岳に足を運んだ理由の一つに当時奥の院

岡山、金比羅、厳島と西国まで足を延ばした後、京都、名古屋を経て帰宅している。ほぼ四力月の旅である。

備前国北方村（岡山県和気郡）の名主の妻武元花は三十九歳の時、西国巡礼を思い立ち、その足で美濃、三河の寺々を参拝し伊勢参宮を果たした。¹⁵

紀伊国の橋本燕志、橋本琴上は奈良、三輪、初瀬の参詣を終え伊勢へ向かい、帰路は鈴鹿峠を越え、瀬田、石山寺、義仲寺、三井寺へ参詣し京都、大坂、和歌山で数日過ごし帰宅した。

備前国の月のや弄花は須磨、明石、難波、奈良を回り伊勢へ向かう。帰路は近江、京都に立ち寄っている。

京都の久米は石山寺、関地蔵へ参り伊勢へ向かう。帰路は伊賀路に入り上野、木津川を経て春日明神、在原寺、三輪明神、唐招提寺、西大寺などを参詣している。

越後国のしう、ふよは善光寺参詣を済ませ伊勢へ向かう。帰路は長谷寺に参詣し、奈良では二日間滞在して方々の寺を回り、大坂、京都でも数日を過ごし、草津、伊那、松本を経て帰郷している。

江戸の中村いとの旅はもともと多く各地の名所旧跡に立ち寄っている。江の島、熱田神宮、伊勢、奈良、吉野、和歌山、大坂、須磨、明石、金比羅、厳島、京都、宇治、近江、善光寺と八十一日の旅である。

の多くが女人禁制であつたにもかかわらず、この奥の院は女人禁制でなかったことにあるのではなからうか。女人禁制でなかったため奥の院には江戸期の女性の墓や夫婦連名の墓が多く建てられている。

五、伊勢への往復コース

女性たちは伊勢参宮の行き帰りにどのようなコースをとつたであろうか。途中立ち寄つた所や回り道をしたもの帰路のコースなどを見てみよう。

向井千子は俳人の兄去来と共に京都を出発して鈴鹿峠を越えて参宮街道に入っている¹⁶。

京都の藤尚資の母唯行院は、津に嫁いだ娘を訪ねるかたがた伊勢参宮をしている。¹⁷

江戸に住む俳人の松本古友は弟の泰里を誘つて東海道を經て伊勢へ赴き、吉野、奈良、石山、京都、宇治、須磨を回り帰路は中山道を経て江戸深川に帰宅したことが各地で詠んだ句から読み取れる。¹⁸

細川清源院は熊本から江戸への帰路、大坂、京都、奈良を経て伊勢参宮を済ませ、佐屋、清須から中山道を通つて江戸へ向かつている。

駿河国の山梨志賀子は秋葉山や鳳来寺に参詣して伊勢へ向かい、京都、宇治、奈良、吉野、高野山、和歌浦、大坂、

出羽国の田中愛は往きは塩尻から飯田越えをして伊勢へ向かい、帰路は鈴鹿峠を越えて近江、京都、大坂、須磨、高砂まで足を延ばし、東海道を下つて豊川に寄り道をして再び東海道を下り、箱根を越え江の島、鎌倉へ寄り、江戸見物の後、日光、松島、多賀城、立石寺とほぼ四力月の旅を終えている。

筑前国の阿倍峯子は瀬戸内海を上り、厳島、金比羅、須磨、大坂に立ち寄り、京都で十日ほど見物し鈴鹿山を越え伊勢へ向かう。帰路は伊賀越えして奈良に入り、三日を過ごし大坂でも七、八日を費やして再び船旅で帰路に着く。

同じ筑前国小田宅子と桑原久子らは舟で瀬戸内海を上り、途中赤間関、厳島、金比羅、音頭の瀬戸の清盛塚、赤穂の花岳寺、須磨などに寄り、大坂、奈良の見物を終え、この旅の目的の一つである吉野の花を満喫し、伊勢へ向かう。

伊勢参宮の後さらに名古屋、馬籠を経て善光寺に参詣し、榛名神社へも立ち寄り日光の参詣を済ませ利根川を渡つて江戸へ入る。江戸で芝居や吉原見物などで五日を過ごす。

江戸からの帰路は江の島、鎌倉見物をした後、無手形の旅であるため箱根や新居の関所を避け、上野原、韭崎を経て諏訪神社を参詣して天竜川を南下し、秋葉山、鳳来寺、豊川稲荷に参詣し、関ヶ原を経て石山寺に参り、京都、宇治の見物に十三日を費やす。大坂でも二日間芝居や歌舞伎、

見世物を見てまわり大坂の川口より舟に乗り筑前へ向かう。ほぼ五月にもおよぶ豪華な旅である。

紀伊国御坊（和歌山県御坊市）の商家の妻瀬戸岩と瀬戸岡野はともに小さなメモ的な旅の記録を残しているが、それを見ると帰路は近江、京都、大坂に立ち寄っている。²⁶河内国の中島休の初参宮は往きに宇治で平等院、万福寺、近江で三井寺、石山寺に参詣し、わざわざ多賀神社にも参っている。鈴鹿峠を越え鈴鹿社や高田御坊に参り、津でも町中の神社へ参詣している。帰路は初瀬の観音、奈良の寺々に参り、生駒山に登って宝山寺に参詣している。

出雲国の西村美須は目的が回国・巡礼であるため西国巡礼の途上伊勢参宮を済ませ、京都の神社に参詣し、天橋立を見て引き返し、中津川、飯田を経て諏訪、善光寺へ参詣の後、日光へ足を延ばす。江戸、横浜、鎌倉見物を済ませ東海道を上り、再び京都、大坂に立ち寄り、須磨、生田などにも寄りつつ故郷へ向かい百五十八日におよぶ旅を終えている。

出羽国の今野いとは象潟、羽黒山、越後の弥彦神社、永平寺などに参詣し草津に到着している。石山寺参詣の後京都へ入り、それより伏見、大坂、須磨、明石、岡山を経て金比羅詣でをして引き返し、高野山、吉野、長谷寺、奈良へ足を運び、伊賀越えして伊勢へ到着。帰路は桑名、名古屋

屋と東海道を經て鎌倉、横浜を回り江戸へ入る。江戸からは奥州街道を通り、福島、山形、横手を経て本荘に無事帰着。百五十一日の長旅である。

女性たちの伊勢参宮はなんと華やかな欲深いまでの行程であろう。単純に伊勢参宮だけを済ませて往復した者は、三十人の中三人程しかない。それも当然の事ながら出発地が近くに限られている。

まとめ

江戸期では旅といえば伊勢参宮と考えられるが、旅をした全ての人が伊勢参宮をしたのでもなく、誰もが伊勢参宮を望んでいたのでもないことは、はじめに述べたように旅日記の十五％が伊勢参宮の記録があることから考えられる。特に目的や役目があつての旅の場合には伊勢参宮をしていない。たとえば、学問を目指して江戸へ遊学した筑前国秋月藩儒者の娘原采蘋や生涯の殆どを旅に過ごした長門国長府（山口県下関市）の俳人田上菊舎や京都に長く住みしばしば旅に出た俳人諸九尼らは伊勢参宮をした記録がない。

江戸期の女性たちの伊勢参宮には大きく分けて三つのパターンが見られる。一つは初参宮といわれる嫁入り前の伊

勢参宮である。これは旅日記にはあまり現れないが、先達の研究²⁷や各地の史料から拾い上げることができる。初参宮には大体は父母や親族が同行する。初参宮は広く世間を見聞させることや体力、自信をつけさせ自立心を養わせる機会となる。また、結婚後は旅へ出る機会も少なくなるため、せめて娘時代という親心も含まれているだろう。初参宮を済ませたことで、いつでも嫁入りできるという世間へのアピールもあり、親の財力の誇示も考えられる。

二つめのパターンは旅日記からも多く読み取れるように隠居の年齢に達したころの参宮である。家業、子育てを終え、時間的にも経済的にもゆとりのある時期である。特に目立つのが商家や農村の女性たちの伊勢参宮である。生駒勘七氏の「通行手形にみる木曾の女性と旅」に木曾郡宮越村の村方文書「御関所手形控帳」の中から四十四年間の女性旅行者を抜きだし一覧表にしたすばらしい論文があるが、その中に四十代から六十代の伊勢参宮をした女性たちを多く見いだすことができる。

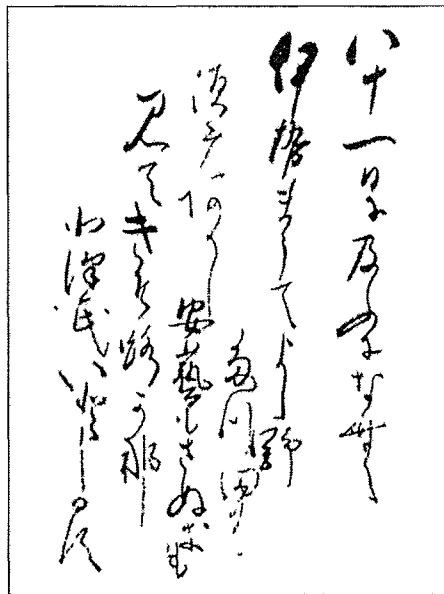
三つめのパターンは御蔭参りや抜け参りである。これは女性たちの旅日記からは殆ど見えてこない。見聞録や各地に残る御用留や大帳などから読み取れる。²⁸伊勢参宮を終えた女性たちは旅日記を書き残したり、神社に絵馬を奉納し記念としている。やはりそのことは人生

のうち大きな記念すべきことであつたであろう。旅日記や絵馬を見た周囲の女性たちも伊勢参宮への思いに掻き立てられる。

伊勢参宮をしたことにより、天照大御神のものと日本という国を感じ取つたであろう。世間のさまざまな生業を目にし、殊に日頃目にしない遊女たちや銭を乞う人々に複雑な思いを持ったであろう。心身ともに強く豊かになったこととはいうまでもない。

女性の伊勢参宮は、初参宮を除いては自らの意思によることが多い。男性の伊勢参宮は講や代参という役目を持ち共同体の行事として出かけることが多いが、女性はあるまで個として行動している。そのことは藪田貫氏も述べている。²⁹そうしたこともあつて女性の伊勢参宮はそのことのみが旅の目的ではなく、各地の文芸の師や仲間を訪ねたり、名所旧跡を訪ねて古人を偲び歌を詠むことも大きな目的であつた。それは八十一日かけた中村いとの「伊勢詣日記」の締め括りの大満足の歌がよく表わしている。

伊勢まうてよし野たつたに須磨あかし安芸もさぬきも見てきそ路かな



中村いと「伊勢詣日記」

〔註〕

- (1) 花鏡并燕志『笠の塵』(天理図書館)。
- (2) 月のや弄花『杖の祝ひ』(天理図書館)。
- 翻刻『江戸期おんな考』第十号桂文庫 一九九九年。
- (3) 田中愛『道の記』(鶴岡市郷土資料館)。
- (4) 阿倍峯子『伊勢詣日記』(福岡県直方市阿倍家所蔵) 翻刻前田淑著『近世福岡地方女流文芸集』葦書房 二〇〇一年。
- (5) 松平繁子『下国日記』(杵築史談) 十四号 一九六二年。
- (6) 柴桂子『旅日記から見た近世女性の一考察』(近世

- 女性史研究会編『江戸時代の女性たち』吉川弘文館 一九九〇年。
- (7) 山梨志賀子『春のみちくさ』(静岡県立中央図書館)。
 - (8) 中村いと『伊勢詣の日記』(国会図書館)。
 - 翻刻『江戸期おんな考』第三号一九九二年。
 - (9) 帆足京『刀環集』(津幡隆編発行『帆足京』)。
 - (10) しう・ふよ『伊勢道中記』(『十日町市史』資料編五)。
 - (11) 頼梅颯『東遊日記』(奈良県立奈良図書館)。
 - (12) 小田宅子『東路日記』(福岡県立図書館)。
 - (13) 中島休『伊勢参宮道の記』(中島三佳著・発行『東海道五十七次—京街道四宿—』一九八六年)。
 - (14) 西村美須『たひのみちくさ』(『日吉津村誌』上一九八六年)。
 - (15) 深見としの『葉桜日記』(『淑徳国文』三十一号 一九八九年)。
 - (16) 松尾多勢子『都のつと』(下伊那郡役所発行『松尾多勢子遺稿』)。
 - (17) 今野いと『参宮道中諸用記』(『本荘市史』史料編)。
 - (18) 細川清源院『青葉山路』(九州大学図書館)。
 - (19) 穴沢民子『雪月集』(豊橋市民文化会館)。
 - (20) 本居美濃『美濃参宮記』(本居記念館)。
 - (21) 前田淑著『近世福岡地方女流文芸集』葦書房。

- (22) 向井千子『伊勢紀行』(『去来先生全集』)。
- (23) 藤唯行院『唯行院殿伊勢紀行』(刈谷図書館)。
- (24) 松本古友『其のしをり』(勝峰晋風『関秀俳家全集』聚英閣 一九二二年)。
- (25) 武元花『西国巡礼道の記』(『登々庵君立関係資料』三 関谷学校)。
- (26) 瀬戸岩『たひにつき』瀬戸岡野『旅日記』(御坊市瀬戸家文書)。
- (27) 生駒勘七『通行手形にみる木曾の女性の旅』(『信濃』第五十三巻十一号 一九八一年)。
- 桑原孝『越後むすめ嫁入り前の伊勢参り』(『歴史と旅』一九九七年五月号 秋田書店)。
- 桑原孝『近世魚沼郡の女性の旅』(『魚沼文化』第三十七号 一九九三年)。
- (28) 『田辺町大帳』枚方『宿村御用留日記』(大田区立郷土博物館『弥次さん喜多さん旅をする』一九九七年)。
- (29) 藪田貫著『男と女の近世史』(青木書店 一九九八年)。

〒一五七—〇〇七四

東京都世田谷区大蔵一十二—十五

TEL・FAX 〇三—三四—一五一—一九三六

『江戸期おんな考』12号合評会のお知らせ

日時	2001年10月26日(金) 午後1時～4時 合評会 午後6時～8時 懇親会 27日(土) 午前9時～ 見学会
会場	ウィルあいち 愛知県女性総合センター 名古屋市中区東区堅杉町1番地 TEL 052-962-2511～3
会費	1,000円(懇親会会費は別途)
宿泊	同センター
交通	JR名古屋駅下車 地下鉄「市役所」駅2番出口東へ徒歩10分
見学会	如来教御本元青大悲寺→断夫山→金刀比羅社→成福寺→熱田神宮→姥堂裁断橋→七里の波(途中昼食) 27日午前9時 ウィルあいちロビー集合
申込先	浅野美和子方 TEL・FAX 0586-62-6605 〒494-0004 尾西市北今字田面二ノ切40-4
申込締切	10月10日(宿泊希望の方は早めにご連絡下さい)